

第2表 市内遺跡出土陶磁器等一覧

番号	出土遺跡	出土位置、層位	種別	特 徴	備 考
1	祢宜内遺跡	1～2層	磁器	肥前染付碗、一重の網目文、見込みに文様、17世紀中頃～後葉	2009年4月27日地点①
2	祢宜内遺跡	表土	磁器	肥前染付碗?18世紀末～19世紀前半	2009年4月27日地点①
3	祢宜内遺跡	1～2層	磁器	肥前青磁、近世	2009年4月27日地点①
4	祢宜内遺跡	1～2層	磁器	染付か白磁、折縁の皿、近世	2009年4月27日地点①
5	大畑遺跡	表採	陶器	大堀相馬、灰釉碗、18世紀	寄贈資料の地点①
6	大畑遺跡	表採	陶器	小野相馬?、灰釉碗、18世紀	寄贈資料の地点④
7	大畑遺跡	表採	陶器	産地不明、鉄釉小甕、近世	市教委分布調査地点J
8	志在家遺跡	表採	陶器	地方窯、近世～近代、灰釉、鉢 ?	2009年度調査
9	志在家遺跡	T9	磁器	肥前、染付、筒茶碗、18世紀後半、外面は樹木、内面は四方襷文	2009年度調査
10	大黒天遺跡	T1、1層	陶器	内外面に釉、鉢か壺、岸窯、17世紀代	2010年2月23日調査
11	大黒天遺跡	表土	陶器	大堀相馬、灰釉碗、18世紀代	2010年2月23日調査
12	八幡坂遺跡	12窯跡、排水溝	磁器	蛸唐草文壺、肥前、18世紀中頃	1987年調査
13	八幡坂遺跡	北側調査区上部確認面	陶器	呉須絵、地方窯、近世～近代	1987年調査
14	八幡坂遺跡	北窯、クロ東2層	磁器	瀬戸美濃、型押の皿、白磁、19世紀	1987年調査
15	八幡坂遺跡	北調査区上部確認面	陶器	小野相馬、淡青色釉、18世紀	1987年調査
16	観音崎遺跡	BC46、2層	陶器	肥前、長石釉碗、17世紀代発色悪い	1977年調査
17	観音崎遺跡	BE46、3層	陶器	美濃灰釉碗、18世紀代	1977年調査
18	観音崎遺跡	AL54、2層	陶器	会津本郷?灰釉鍋?蓋がつくもの	1977年調査
19	観音崎遺跡	3住Cコーナー溝	磁器	プリント、新しい	1977年調査
20	観音崎遺跡	表採	陶器	新しい	1977年調査

第3章 歴史資料からみた大畑遺跡周辺

近世の大畑遺跡周辺

ここでは、主に近世における大畑遺跡周辺の姿を史跡や史料を通して概観してみたい。

遺跡地図に見られるように、大畑遺跡の範囲は東北本線白石駅の北に大きく広がっている。

遺跡範囲の西端、少し突き出した辺りに白石城の厩口門を移築した延命寺がある。延命寺は真言宗で、門以外にも境内には幾つか興味深い伝承を持つ史跡がある。

ひとつに、現在小字名にもなっている不澄ヶ池がある。^{すまずが いけ}今では水が無く石組を残すのみとなっているが、かつてはその名のとおり小さな池であった。その昔、平泉にあった源義経一行が兄頼朝のもとに馳せ参じようこの地を通った際、供の武蔵坊弁慶がこの池で薙刀を研いだところ、その錆から池が濁りその後澄むことがなくなってしまった事からその名が付いたという。

同じく境内には安珍地蔵尊^{あんちん}が安置されている。これは、もともと別の寺院にあったものが、その寺院が廃寺になりこちらに移された。安珍は白石出身で、伊具郡（現在の角田市）の東光院という修験寺で出家し、熊野三山に修行に向かう際紀州にて清姫という娘と恋仲になる。しかし、修行の妨げになるとして安珍は逃げようとしたが、清姫の執念凄まじく、どこまでも追いかけられた挙げ句、寺の鐘に隠れていたところを蛇身と化した清姫に巻き付かれ恋の熱気で焼け死んでしまったのだという。その追善供養のために建てられたのがこの地蔵尊で、誰にも知られることなくこの地蔵尊の足指を舌で嘗めてお祈りすると苦しまずにコロリと死ぬことが出来るという伝承がある。（飯沼 1984）

また、延命寺の南東には寺屋敷前や堂場前といった字名があるが、これはかつて常林寺（現在は白石市南町にある。）がこの場所にあったことに由来するといわれる。

遺跡範囲の東側は現在の白石市郡山地区である。中に五昇路^{ごしょうろ}という字名があるが、これは「後

生路」とも表し、葬列の通る道を意味する。(風間 1984) この一帯には、先の寺屋敷前や堂場前のほかにも、この五昇路や観音崎、弥陀内、祢宜内、十王堂前などといった宗教色を感じさせる地名が多く残っている。

さて、大畑遺跡の範囲は、近世の旧地名で言うところの白石本郷と郡山村にまたがっている。

まず白石本郷は、白石城主片倉家ほかその家中が住む家中丁、奥州街道沿いに整備された宿場町である本町、中町、長町、亘理町、短ヶ町、新町の白石六町、それ以外の一般の村に該当する部分の3つに分けることが出来るが(亘理 1984)、大畑遺跡のある地域は白石六町の東側、所謂村にあたる場所である。「風土記御用書出」(以下「書出」。白石市 1974『白石市史 5』所収)によると、本郷全体の村高は、

「一田代 百拾五貫九百八拾四文

一畑代 拾九貫九百七拾七文

畑代三百九拾九文之所雜穀御蔵場 但茶畑無御座候事

都合 百三拾五貫五百六拾一文 右ハ一圓御知行山林野川共」

と 135 貫 561 文 (1,355 石 6 斗 1 升) である。これは、刈田郡内の片倉領 18ヶ村で三沢村(現白石市大鷹沢三沢)に次ぐ第2位の高となる。

そして、「右ハ」以下により片倉家による一円知行が行われていたことが分かる。一円知行とは、屋敷や田畑のみならず山林、沼沢、原野なども含め、その知行地全体の自由裁量が認められた知行形態を言う。

片倉領では、知行地はさらに農民の耕作地(百姓前)と家中への知行地(家中給分)、足軽耕作地(足軽高)の3種に分類される。足軽の場合、家中給分と違いその土地にかかる年貢を農民同様領主に納めたことから、足軽耕作地は領主片倉家の蔵入地と位置付けられている。(白石市 1979)

領内におけるそれぞれの高の平均を割合で見ると、おおよそ百姓前と家中給分が共に 35%程度、足軽分が 30%程度であるが、本郷の場合全体の 61%を家中給分が占める一方、百姓前は 21%程度と領内最低である。足軽高(蔵入地)を含めると武士の土地が実に 8割を占めることになり、平均を大きく上回り領内でも高い部類に属するが、これは城下に近く比較的条件の良い耕地が広がっていた為とされている。(亘理 1984)

ちなみに、その人数構成は「書出」によると以下のとおり百姓人頭が 165 人、家中が 176 人となっている。

「一人頭 百六拾五人 内一村住居五人 一町住居百五拾貳人

一寺 五ヶ寺 一修験 壹ヶ院 一社人 貳人

外御家中前 百七拾六人 内寺三ヶ寺 修験四ヶ院

(中略)

一寛永十九年御竿答仕御百姓ニ相立候者九十八人ニ御座候処其後六十七人相増(以下略)」

一方、郡山村は白石本郷の東に位置し、本遺跡の範囲となるのは小字で荒屋敷、五昇路と観音崎の一部である。

同じく「書出」によると、村高及び人数構成は以下のとおり。

「一田代 三拾貳貫百拾六文

一畑代 八貫六百貳拾文 但茶畑三十一文

都合 四拾貫七百五文

右者一圓御知行山林野川共

一人頭 拾八人 内寺 壹ヶ寺

外御家中前 貳拾參人 内御家中修験 壹ヶ院

一寛永十九年御竿答仕御百姓ニ相立候者六人ニ御座候処其後十二人相増（以下略）」

村高は 40 貫 705 文（407 石 5 升）、百姓人頭が 18 人で家中が 23 人となっている。

この郡山村については検地帳が残っている。（『白石市史』5 所収）その検地帳は、寛永検地の内容を後代に写したものであると思われるが、当時の検地帳で 1 村すべてが確認されているのは白石市関係ではこの郡山村のみであるという点で大変貴重である。これにより個々の田畑の位付けと面積を知ることができる。

それを一覧表で示したのが表 1 で、それぞれの割合を円グラフで示したのが図 1 及び図 2 である。田畑の位付けは、上々、上、中、下、下々の 5 段階である。一見して、田畑ともに下及び下々の位が耕地面積の半分若しくはそれ以上を占めていることが分かる。対して上及び上々の位は田で 21%、畑で 20%にすぎない。

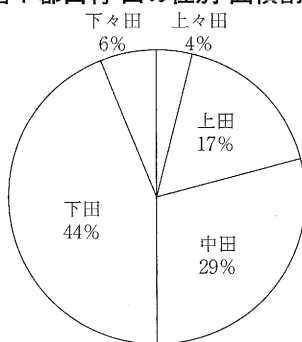
表 1 郡山村田畑の位付けと面積

	上々田	上 田	中 田	下 田	下々田
第1冊	3反4畝8分	2丁1反26分	2丁9反6畝13分	4丁5反7畝15分	5反1畝5分
第2冊	6反6畝6分	2丁3反3畝16分	4丁6反4畝1分	6丁6反28分	1丁3畝4分
計	1丁14分	4丁4反4畝12分	7丁6反14分	11丁1反8畝13分	1丁5反4畝9分
田 合計	25丁7反8畝2分				

	上々畑	上 畑	中 畑	下 畑	下々畑
第1冊	1丁25分	1丁8反5畝29分	2丁6反3畝5分	5丁9反9分	8反12分
第2冊	6反2畝24分	1丁7反8畝17分	3丁3反16分	6丁1反9畝26分	1丁4反1畝4分
計	1丁6反3畝19分	3丁6反4畝16分	5丁9反3畝21分	12丁1反5分	2丁2反1畝16分
畑 合計	25丁5反3畝17分				

※「刈田郡郡山村御検地帳」（第1冊及び第2冊。『白石市史』5所収。）より作成。表記は同書による。
ほか、茶畑が下茶畑26分、下々茶畑7分ある。（2冊合計）

図 1 郡山村 田の位別 面積割合

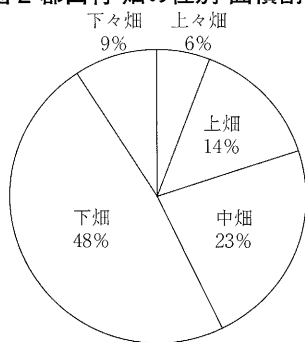


また、寛永検地以後新田開発が盛んに行われた仙台藩内において、郡山村ほかの刈田郡一帯は極めて開発高が低く、郡単位では宇多郡、気仙郡に次いで 3 番目の低さで、1 村平均にすると領内最低（藩政期を通して約 52 石）であることが明らかにされている。（高倉 1987）しかしながら、寛永 19 年（1642）から安永 6 年（1777）までの間に、白石本郷では人頭が 98 人から 165 人と凡そ 1.7 倍に、郡山村では 6 人から 18 人へと 3 倍に増加していることから、それぞれの持高が細分化、つまり農民層の分解が進行しているとの

指摘もある。（亘理 1984）

「鉦で頭を剃るか 裸で茨を背負うか 刈田で百姓をするか」という言葉が今に伝わっている

図2 郡山村 畑の位別 面積割合



が（関谷 1972）、これは位が低く狭小な土地しか持ち得なかった百姓達の厳しさを物語っていると言えよう。

一方で、この地域は紙類、温麺、生糸などの産物を有している。他の地域で盛んに新田開発が行われていた17世紀代に大きな高の増加を見ることがないこの地域で、史料的な厳しい制約はあるものの、稲作だけではない百姓経営のあり方を捉え直すことはできないだろうか。史料に見る人頭増加と実際に個々の経営にもたらした変化という問題も踏まえ、近世における当該地域の経済関係の再検討は今後の課題である。

これまで見てきたように、近世における大畑遺跡周辺の姿は城下近郊の耕作地帯であった。

第4章 ま と め

- 1 祢宜内遺跡では堅穴住居跡等の拡がりが確認され、集落が西へ延びることが判明した。住居跡等の密度が高いことが明らかになった。
- 2 大畑遺跡地点②では、詳細な時期が不明の溝跡が発見された。大畑遺跡の北側にあたる今回の箇所周辺には、堅穴住居跡は存在しない可能性がある。
- 3 志在家遺跡では、丘陵の西及び南側を中心に遺構が確認された。東側は削平されていると考えられる。円筒埴輪片の出土は大きな意味を持つ。これまで、白石盆地中心部の平野部における埴輪を伴う古墳は、鷹巣古墳群と亀田古墳群のみが知られていた。一昨年になって、鷹巣古墳群の立地する丘陵下でも埴輪の出土が確認されたが、今回の出土場所は鷹巣古墳群から約1.2km南であり従来、埴輪を伴う古墳が確認されていない箇所であった。鷹巣古墳群と亀田古墳群の中間に位置する箇所から円筒埴輪片が出土したことは、既に破壊された古墳もしくは窯跡が存在していた可能性が高いことを示している。